

日本語教育における「女ことば」 —女性文末詞の使用に着目して—

高木 敬子[†]

"Women's Language" in Japanese Language Education: Focusing on the Use of Feminine Sentence-Final Particles

Keiko Takagi

1. はじめに

筆者は、以前から日本語教育の初級段階において、学習項目としても存在せず、教室でも教えることもない「～のよ」「～わよ」といった「女性文末詞」が聴解問題の中に漫然と出現していることが気になっていた。

先行研究によれば、日本語教材（教科書、聴解教材、試験問題）において、「女ことば」は、実社会の自然会話における使用の10倍以上の割合で出現していることが報告されている（水本・福盛・高田、2009）。学習項目としても存在せず、教室でも教えることもない「女ことば」が聴解問題の中に出現していて、果たしていいのだろうか。日本語学習者が「女性文末詞」を、女性はこのように話すものだ、話さなければならない、と思ったとしたら、それはそのまま看過していいものなのだろうか。

2024年4月から、認定日本語教育機関や登録日本語教員の制度が始まり、昨今の世の中のジェンダーに対する意識の変化の風潮も甚だしいが、日本語教育の教材は時代に追いついているのだろうか。

本稿では、外枠からの変化に対し、現状の教室の現場の日本語教育の中で、「女ことば」に焦点を当てて、現場の中でも時代の変化とともに変化が必要な点があれば、それを明らかにしたうえで、いくつかの提案を行いたい。

2. 「女ことば」とは

国語学会編（1980）によれば、女性語の【特質】として7つが挙げられている。例えば、（1）女性特有の単語を使う、（2）漢語などの固いことばや野卑な、下品なことばを避ける、（3）間投詞や終助詞などの強意語を多く使う。女性特有のものがある、等々であるが、本稿では、上記の【特質】の中でも（3）の「間投詞や終助詞などの強意語を多く使う。女性特有のものがある」と書かれた部分

の「終助詞」に着目する。

2.1 「終助詞」の中の「女性文末詞」

国語学会編（1980）によると、終助詞とは、話し言葉の文末で頻繁に用いられているものだが、地域、性別、年齢による変種が多いとの記述がある。

本稿では、終助詞全般ではなく、終助詞の中でも、性別が「女性」であって、「女性」が用いる特徴的な表現である「～のよ」「～だわ」と言うような「女性文末詞」にのみ、焦点を当てる。

2.2 「役割語」

金水（2014）は特定の人物像と強く結びついている言葉づかいについて「役割語」という概念を提示し、次のように述べている。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

(p.205)

上記の定義によれば、女性特定の言葉づかいとされるものは、女性としての役割語と考えられる。日本語学会編（2018）は、類似の概念である、位相差、社会方言などでは、現実社会における話し手がいることが必須であるが、「役割語」は、現実の話し手がいるかどうかは問題ではなく言語面におけるステレオタイプ的知識の一種である、としている。であるならば、日本語学習者は女性特定の言葉づかいを聞いて、発話しているのは女性だと想起する知識を持つことまで求められてしまうということになる。

[†]2024年度修了（人文学プログラム）

2.3 「女ことば」の歴史

中村（2012）によれば、『女ことば』は自然発生的に女性が使い始めて生まれたものではなく、つくられたものだという。明治5年の学制で、日本の女性が初めて公式に学生となったときは「女ことば」は存在しなかった。その後、明治12年に男女共学が廃止された。すると一部の女学生たちが「てよ」「だわ」「のよ」「こと」などの言葉づかいを始めた。いわゆる「てよだわ言葉」といわれるものだ。中村（2007）は、「女子学生は、「男女は等しく教育を受けるべき」であるが「女には男とは異なる役割がある」という矛盾に対するささやかな抵抗として、このような言葉づかいをはじめたのではないだろうか。」と述べている。その「てよだわ言葉」を今度は、言文一致小説の書き手がハイカラなイメージとして西洋の若い娘の翻訳に用了いた。さらに、それを読んだ若い女性たちが使うことによって「てよだわ言葉」は普及していった。しかし、その言葉づかいは、良妻賢母教育の反抗とみなされ、それは身分の低い人達の言葉づかいから生まれたという理由をつづられ批判された。果てには軽薄とされ、国語としてみなされなかつた。

ところが、第二次世界大戦が始まるとそれが一転した。植民地支配にあたり、「日本語の優秀さ」や「他国に対する優位性」を示すことが必要になると、「女ことば」は格上げされ国語に組み込まれた。「女ことば」は、天皇制国家の伝統あるものとされた。

やがて、第二次世界大戦に敗れたが、天皇が統治権を放棄して「象徴」として生き延びたように、女ことばも天皇制国家の伝統、大東亜の共通語の優位といった政治的意味を放棄し「自然の女らしさ」と結びつけられ「女性ことば」は生き延びた。

2.4 「女性文末詞」の先行研究

村田（2018）は、母語話者にとって、規範的な位置づけとなる「学校教育における国語」の最初の段階、すなわち初等教育一年目の小学校の国語教科書で、「女ことば」を中心に広い意味で性別語がどのように提示されているのかを調査している。データの種類は、文部科学省検定教科書の小学校国語科用（一年生）上巻で、5つの出版社を選び5冊を調査対象資料としている。データの分析方法としては、各教科書ごとに人称詞ならびに女性専用の11の文末形式（「(だ)よ」、「(だ)ね」、「(だ)よね」、「わよ」、「わね」、「わよね」、「のよ」、「のね」、「のよね」、「の(断定)」「かしら」）が、何回現れたかを全数調査している¹⁾。

この調査の考察として、女性文末形式として選択した11の指標のうち、出現したのは、「(だ)よ」「(だ)ね」「わね」「のね」「の(断定)」「かしら」の6形式のみであった。それまでの研究で男女差の縮小傾向が明らかにされて

いたが、実際にこの調査を通じて、女児の発話に「だ」の使用が多いことが確認できたという。終助詞「わ」は衰退傾向にあると言われるが、母親の役割語として出現していること、母親の役割が「女ことば」によって象徴されている例が見られることも確かめられたと村田（2018）はまとめている。

次に日本語教材を扱ったものとしては、水本・福盛・高田（2009）がある。1994年から2006年の間に出版された日本語教材合計39種（教科書、聴解教材、試験問題）の調査において、「女性文末詞」は、実社会の自然会話における使用の10倍以上の割合で出現していることが報告されている。ただし、この研究は、2009年のもので、日本語能力試験（JLPT）も改訂前であり、また日本語教材の『みんなの日本語』も、改定前の古い版のものを資料としている。そのため、それ以降の日本語教育の教材の調査の余地はまだ残されているものと考えた。

2.5 女性文末詞の選定

本稿における「女性文末詞」の指標としては、金水（2014）が2010年以降と新しく、役割語について網羅しているため、そこに載っている「女ことば」を根拠とすることにした。また、さらに詳しく検討する必要がある際には、金水（2003）にも根拠を求めた。

表1 「女性文末詞」対照表

	女性文末詞	水本・福盛 ・高田（2009）	村田（2018）	金水（2003； 2014）
1	だね	○	○	○
2	だよね	○	○	○
3	かしらね	○	○	○
4	てね			△
5	なさいね			○
6	のだ		○	○
7	のか（疑問）			○
8	のだね		○	○
9	のだよ	○	○	○
10	のだよね		○	○
11	だよ	○	○	○
12	てよ			△
13	わ	○		○
14	わね	○	○	○
15	わよ	○	○	○

前述の先行研究から、村田（2018）及び水本・福盛・高田（2009）で指標とされた女性専用文末形式と本稿で指標とした「女性文末詞」のまとめたものが表1である。（ただし、村田（2018）の「わよね」に関しては、母語話者の国語教科書の調査での出現が「0」、且つ、水本・福盛・高田（2009）にも選出されていないため載せていない。）

本稿では、表の黄色部分の15形式を選択することとした²⁾。

2.6 「女性文末詞」の接続について

上記のように15形式を選んだが、「終助詞」との区別を

¹⁾ 見せ消しで示してあるのは、終助詞「だ」の不使用（削除）である。

²⁾ 金水（2014）からの選定は○、金水（2003）からの選定は△とした。

明確にするためには、その直前につく品詞の接続についても整理をしなければならない。よって、表1をベースにその接続を表2にまとめた。

表2の1番の「ね」を例に用いて説明したい。そこで、①「おいしい」(形容詞)②「きれいな」(形容動詞)③「カバン」(名詞)の3つの品詞にそれぞれ「ね」を接続してみることにする。まず、直前の品詞が①「おいしい」(形容詞)について、最後に「ね」をつけると、「おいしいね。」となる。下線部の「ね」は、「ね」の直前の語が「おいしい」という形容詞であり、文としては成立するが、これは、男女ともに使用する終助詞の「ね」ということになってしまう。表2の1番を確認すると、金水(2003; 2014)も水本・福盛・高田(2009)も「ね」が付されていても直前の品詞が、い形容詞ならば、「女性文末詞」とみなさないとしていることがわかる。村田(2018)は、「だ」の脱落としているが、仮に、「だ」を入れてみると、「おいしいだね。」となってしまう。よって、村田(2018)においても形容詞は「女性文末詞」とはみなさない、という解釈ができる。

次に、直前の品詞が②「きれいな」(形容動詞)や③「カバン」(名詞)の場合を考える。「ね」をつけると「きれいね。」や「すてきなカバンね。」となり、表2の金水(2003; 2014)も水本・福盛・高田(2009)も「女性文末詞」とみなしている。村田(2018)が「だ」の脱落としているものにおいても、それぞれに「だ」を入れてみると、「きれいだね。」「すてきなカバンだね。」となり、男女共用のジェンダーレスな表現となる。村田(2018)も「だ」の脱落、「きれいだね。」「すてきなカバンだね。」を行うことにより、「きれいな」(形容動詞)や「カバン」(名詞)についての「ね」は「女性文末詞」であるとしている。よって、表2における接続の表現はそれであるが、3つとも、何を「女性文末詞」とするかという点においては、同様のものを指していると言ってよい。

本稿では、文末詞をこのように定めた上で、初級の文法

項目にない「女性文末詞」について、山内(2013)が「公式な学習(�式 Learning)」と分類するような場面でどの程度出現するのかを明らかにするために、日本語能力試験(JLPT)の公式問題集及び初級教科書の調査を行った。

3. 調査方法と資料

上記の調査を行うために、2.5で選定した15形式が、どのくらい出現するのか、調査資料1と調査資料2を全数調査した。調査はまず、調査資料において、文末が本稿で定めた「女性文末詞」に該当するもの全ての抽出を行った。次に表2に則り、1文ずつ文末の直前がどのような品詞であるかを確認した上で、本稿で定めた15形式の「女性文末詞」に該当するかどうかを判定した。

3.1 調査資料1 日本語能力試験(JLPT)公式問題集

これは、試験の主催元の国際交流基金、日本国際交流支援協会編が発行している日本語能力試験(JLPT)の公式問題集のN1~N5である。現時点では、2012年発行・2018年発行の2か年分が発行されており、本調査では、聴解試験部分(即時応答を除く会話部分)のみを調査対象とした。

3.2 調査資料2 『みんなの日本語』初級I・II³⁾

『みんなの日本語』は、初級Iは第1課~第25課、初級IIは第26課~第50課という2冊セットになっている。内容はそれぞれの課ごとに「文型」「例文」「会話」「練習ABC」「問題」という構成となっておりこの構成は第1課から第50課まで変わらない。

本稿における調査は、その中の、会話形式になっている箇所である「例文」「会話」それから「問題」の中に組み込まれている聴解問題を対象とした。

4. 結果と考察

調査資料1と調査資料2いずれにも「女性文末詞」の出現が見られた。以降考察を行う。

4.1 調査資料1日本語能力試験(JLPT)公式問題集

レベル別に下から見していくと、両年ともN5に出現はみられなかった。N4は、例文と2012年にそれぞれ1回だけ出現が見られた。2018年には「0」となっている。N1~N3は、2か年とも、すべてのレベルに出現しているのだが、レベルが上がるごとに出現が増加しているのではなく、N2に「女性文末詞」の出現が多いことがわかった。

表2 「女性文末詞」の接続(直前の品詞)のまとめ

女性文末詞	金水(2003; 2014)	水本・福盛・高田(2009)	村田(2018)
1 ね	名詞、形容動詞の語幹(そうね、みたいね、ようねを含む)	名詞・な形容詞・ね	「だ」の脱落
2 よね	名詞、形容動詞の語幹	名詞・な形容詞・ね	「だ」の脱落
3 かしらね	文末(「かしら」を含む)		
4 てね	動詞の連用形・疑い命令の「~て」に「ね」が付く形。 「てよ」より柔らかい確認調になる。		
5 なさいね	命令形		
6 の	平叙文 文末 活用語の連体形(のね、のよ、のよねも同様)	動詞・い形容詞・な形容詞・名詞・の	断定
7 の	疑問文 文末 活用語の連体形(のね、のよ、のよねも同様)	動詞・い形容詞・な形容詞・名詞・の	
8 のね	文末 活用語の連体形	動詞・い形容詞・な形容詞・名詞・の	
9 のよ	文末 活用語の連体形	動詞・い形容詞・な形容詞・名詞・の	
10 のよね	文末 活用語の連体形	動詞・い形容詞・な形容詞・名詞・の	
11 よ	断定の助動詞(「じゃ」「だ」「っす」など)を介さずに文末で直接	名詞・な形容詞・よ	「だ」の脱落
12 てよ	動詞の連用形・疑い命令の「~て」に「よ」が付く形。		
13 わ	文末の助動詞・形容動詞・助動詞 (推量・意志・動詞の助動詞「う」「よう」は除く)の後ろ		「わ」の付加
14 わね	文末の助動詞・形容動詞・助動詞 (推量・意志・動詞の助動詞「う」「よう」は除く)の後ろ		「わ」の付加
15 わよ	文末の助動詞・形容動詞・助動詞 (推量・意志・動詞の助動詞「う」「よう」は除く)の後ろ		「わ」の付加

³⁾ 以降2冊合わせて『みんなの日本語』と表記する。

日本語教育における「女ことば」 —女性文末詞の使用に着目して—

2か年の比較をすると、2012年に比べて、2018年の方が「女性文末詞」の出現がかなり減少していることが明らかになった。特に、2018年の問題において、N1とN4に至っては、「0」という結果であった。この結果から、N1～N5まで近年のジェンダーレスな社会の風潮に合わせて問題が考えられているのではないかと推察する。にもかかわらず、例文に同じものが使用されており、そこに「女性文末詞」が出現しているので、そこに対する配慮の余地は残されたままのようである。(図1)

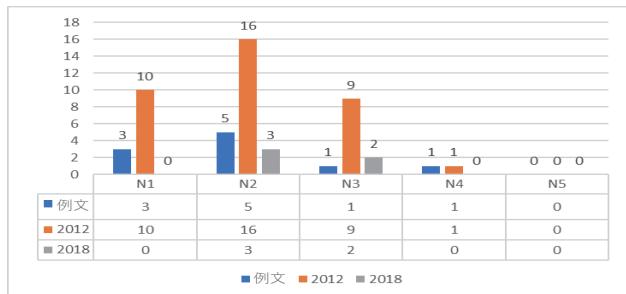


図1 日本語能力試験 (JLPT) 2012・2018年の「女性文末詞」出現数比較

次に図2でまとめたのは、各レベルで出現した「女性文末詞」であるが、「だ」が脱落した形の「ね」に関しては、N1～N4まですべてに出現している。「のよ」もN1～N3まで出現がみられた。N1だけにみられたのは「かしらね」であった。「のよ」もN4以外では出現しており出現度の高い「女性文末詞」といえる。全体として、本稿で選定した15形式の指標において、「なさいね」以外は、すべて出現が確認できた。『みんなの日本語』を終了することで想定される日本語能力試験 (JLPT) の合格はN4である。従って特にN4で出現が確認できた「ね」と断定の「の」について『みんなの日本語』に出てきているのか、次項の調査資料2の結果で確認をしておく必要がある。

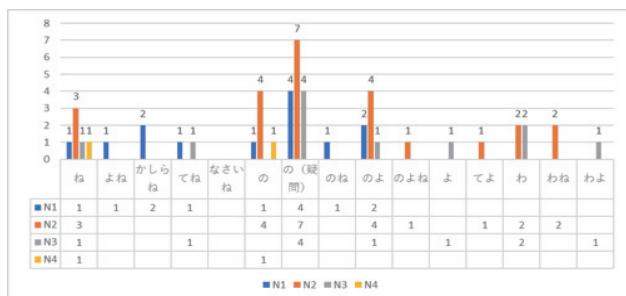


図2 各レベルで出現した「女性文末詞」

4.2 調査資料2 『みんなの日本語』

下記の図3のとおり、『みんなの日本語』のIよりIIのほうに多く「女性文末詞」の出現が見られた。ただ、初級の1冊目である『みんなの日本語』Iの聴解に1回でも出現があったことは特筆すべき点だろう。総じて「会話」「聴解」「例文」の中で出現が圧倒的に多かったのは音声の「聴解」であった。文字として現れる部分（文字ベース）

では、「会話」部分での出現は皆無であり、「例文」でも出現は1回だけだった。それは『みんなの日本語』IIの第41課の例文の2でお母さんが子供に「だめよ。」と言い聞かせる表現であった。教科書の文字ベースとしての「女性文末詞」の出現は、それのみであった。

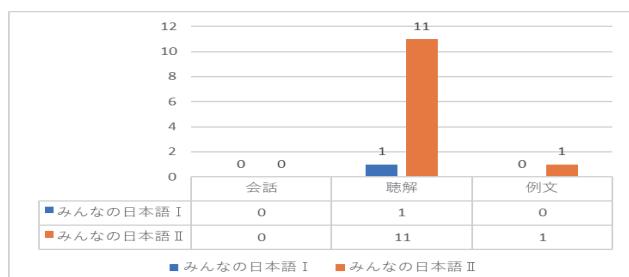


図3 『みんなの日本語』における「女性文末詞」出現箇所

ここで、問題にすべきなのは、圧倒的なシェアを誇る教科書の「聴解」部分に12回もの出現があったということだ。文字ベースではなく、「聴解」の問題で出現しているということは、そこに「刷り込み」が起こり得ると思われる。

また、調査資料1の日本語能力試験 (JLPT) N4で出現が確認できた「ね」と断定の「の」について、それらが『みんなの日本語』に出てきているのか、確認をしておく必要があった。結果としては、文字ベースでの出現はなく、『みんなの日本語』IIの「聴解」部分に「ね」が3回、断定の「の」が1回の出現がみられた。(図4)

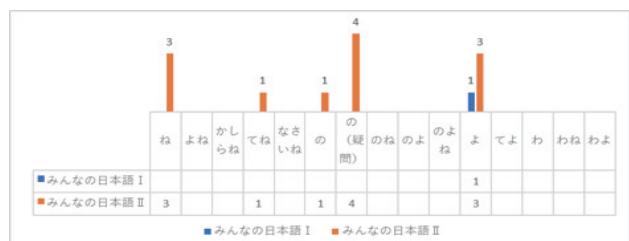


図4 『みんなの日本語』で出現した「女性文末詞」

よって、『みんなの日本語』の「聴解」で出現している「女性文末詞」が日本語能力試験 (JLPT) の聴解問題N4でも出題されているということになり、その点においては整合性が取れていることがわかった。

最後に、調査資料1及び2で、どのような「女性文末詞」が使われていたのかをまとめると。

まず、調査資料1の日本語能力試験 (JLPT) 公式問題集では、選定した15形式のうち「だね」「だよね」「かしらね」「てね」「のだ」「のか(疑問)」「のだね」「のだよ」「のだよね」「だよ」「てよ」「わ」「わね」「わよ」の「なさいね」を除く14形式の出現が確認できた。

調査資料2の『みんなの日本語』では、選定した15形式のうち「だね」「てね」「のだ」「のか(疑問)」「だよ」の5形式の出現が確認できた。そのうちの「だよ」だけは、聴解の音声のみならず文字ベースで1回出現があった（先述した『みんなの日本語』IIの第41課の例文の2でお母さん

が子供に「ダメよ。」と言っている箇所)。それ以外は、調査資料1及び2の調査において、全て聽解という「音声」としての「女性文末詞」の出現であった。

初級では「女性文末詞」を教える文法項目が設けられていない。にもかかわらず、公式な学習 (Formal Learning) に位置づけられる日本語能力試験 (JLPT) 公式問題集と『みんなの日本語』の聽解問題に「女性文末詞」が多く出現しているということが本調査で明らかになった。

5. おわりに

本稿で研究対象を「終助詞」ではなく、「女性文末詞」としたことには、理由がある。それは女ことばの歴史で見たとおり、「女性文末詞」には、女性に対する差別というものが内在しているからである (中村2007; 2012)。

本稿の女性文末詞の調査の結果、日本語能力試験 (JLPT) では少ないけれどもN4からの出現が認められたうえ、さらには、『みんなの日本語』においても出現が確認できた。『みんなの日本語』は、N4からN3の合格に相当するものである。ところが「女ことば」について教授する文法項目は設けられていない。教えてもいないのに、日本語能力試験 (JLPT) の聽解問題に出現してしまうというのは、本来あってはならないことではないだろうか。「女性文末詞」が正式な教授項目に入っていないということは、現実には使われていない「役割語」にすぎないはずの「女性文末詞」が、それが「役割語」であるという意識をもたないまま、「女性文末詞」が「望ましい言葉づかい」として刷り込まれてしまう可能性が否定できない。

「女性文末詞」は単なる「役割語」ではない。女性差別を含んだ役割語なのであり、それを公式な学習の現場で使うことは、公式な学習の場に女性差別を持ち込むことに他ならない。

学習者が万が一、女性だからといってこういう言葉遣いをしなければいけない、あるいは使用することが期待されている、と思ってしまったなら、それは実態とまず乖離する。そして、「女ことば」というもの自体が女性の差別と関わっているという観点から見れば、それを「刷り込み」という形で教えるのは決して望ましいものではない。

聽解問題であれば、男女の音声があれば、そこに「女性文末詞」は必要ではないだろう。改善の余地があるとすれば、「女性文末詞」に特徴的な「だ」の不使用をやめ、どちらも使用できるジェンダーレスな表現に改めればよいはずだ。社会の流れに沿って、日本語教育の中でも、「女性文末詞」の使用を控えていく必要があるだろう。

せっかく、日本語教育の法制度がようやく整い、動き出し、いまだかつてないほどの変革期を迎えたのである。これをきっかけに、次の段階として「公式な学習 (Formal Learning)」である日本語能力試験 (JLPT) と『みんなの日本語』に入り込んでいる差別用語である「女性文末

詞」の使用についての処遇の議論が進むことを切望する。

謝辞

本論文の執筆にあたり、最後までご助言、ご指導を下さった大橋理枝先生に心から深く感謝を申し上げます。仕事の関係で休学期間を挟み、復学後も、やはり仕事との両立で果たしてやり遂げることができるのが不安でいっぱいでしたが、最後までやり遂げられたことは大橋先生のご指導のおかげにほかなりません。幾重にも感謝と御礼を申し上げます。

最後に、必死な私の姿を近くで応援し見守ってくれた家族、特に私の母に深く感謝します。有難うございました。

引用文献

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
 金水敏編 (2014) 『<役割語>小辞典』 研究社
 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版
 中村桃子 (2007) 『「女ことば」はつくられる』 ひつじ書房
 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』 岩波新書
 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』 東京堂出版
 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞—実社会における使用実態調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』 第9号, 11-26
 村田年 (2018) 「国語教科書の中の「女ことば」: 小学1年生用教科書(上巻)を資料として」『日本語と日本語教育』 46, 45-71
 山内祐平 (2013) 「教育工学とインフォーマル学習」『日本教育工学会論文誌』 37 (3), 187-195

調査対象資料

- 調査資料1 日本語能力試験 (JLPT) 公式問題集**
 『日本語能力試験公式問題集N1』 (2012) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N2』 (2012) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N3』 (2012) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N4』 (2012) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N5』 (2012) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N1』 (2018) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N2』 (2018) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N3』 (2018) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N4』 (2018) 凡人社
 『日本語能力試験公式問題集N5』 (2018) 凡人社

- 調査資料2 『みんなの日本語』**
 『みんなの日本語』 初級 I 第二版 (2012) スリーエーネットワーク
 『みんなの日本語』 初級 II 第二版 (2013) スリーエーネットワーク